山陽新聞（夕刊）
2018年（平成30年）7月25日　水曜日

一日一題

行商がゆく⑧手をつなごう

リゾーム専務　金藤　純子

被災からの復興で一番大切なことは何か。それは「生きる力」です。生きる力はどこから生まれてくるのでしょうか。私は「人とのつながり」だと学びました。

倉敷市真備町で豪雨災害に見舞われ間もなく3週間。被災地では土砂のかき出しや片付けが続いています。一方、民間賃貸住宅の借り上げ提供の申し込みが始まり、生活再建に向け、一歩踏み出したところです。被災してからというもの、罹災（りさい）証明をはじめ住民票や印鑑登録証明書の発行、保険会社への連絡、全壊した家屋の家財廃棄、水没した自家用車のレッカー車移動、代車や新車の手配、ガス、水道、電気の停止、電話やケーブルテレビの一時停止など日々手続きに追われました。こうした手続きは被災者本人でなければ進みません。ですが、片付けに追われて、やらねばならぬ手続きや新生活再建に向けた活動が遅れているご家庭も多いのです。

しかし物理的負担以上に重かったのは、引っ越し後の近所に知り合いがいないという心理的負担でした。私の母もふさぎ込み「水が出るようになったら平屋を建てて真備に戻りたい」と希望を口にします。ご近所の親しい友達と日々を過ごしたいのです。

このような感情を「ぜいたくだ。住む所が決まっただけいいじゃないか」と考えるかどうか、私は迷っていました。ところが23日にこんなことがありました。引っ越し先の近くの100円ショップで知り合った方の親戚が真備町川辺の被災者、近くのスーパーで遭遇した小中高の同級生とお母さんも被災者、その全員がうちの母と友達だったのです！　さらにもう一人が同じマンションに引っ越してくることに。この奇遇に歓喜し生き生きする母の様子をみて「コミュニティーとは何か」ということを深く考えさせられたのです。

物質面での生活再建と同等かそれ以上に「人とのつながり」の再建が重要です。自身と家族が被災して、人間は社会との関わりが希望をもたらす光なのだと痛感しました。

2018・7・25